

# Eureka XI

六年制通信 No.9 令和5年6月9日(金)号

## グローバル化と言うのなら

三年前のユリイカにウズベキスタンのナボイ劇場の話を書きました。読んでいない学年もあるので、少し要約してもう一度書いてみます。

第二次大戦後、旧ソ連によって不当に捕虜とされた日本人がシベリアなどで強制労働をさせられました。これは歴史の時間で習いますね。その中で数百名の日本人がウズベキスタンのナボイ劇場の修理を命じられました。彼らはどうしたか。現地の人に感動を与えるほどの働きぶり仕事の丁寧さを示したのです。ロシア人に見張られていてもいなくても働きぶりに変化がない、そのあたり他国の人には理解できないらしい。隙あらばサボろうとする人が普通なのでしょうね。しかし私たちの父祖の世代の日本人は違いました。自発的にいい仕事をしようとする、その労を惜しまぬ姿勢は現地の多くの人の尊敬を集めたそうです。自分の子どもに「大きくなったら日本人のようになりなさい」と教えた母親もいたと聞きます。完成後およそ20年がたった時、大きな地震に見舞われ町の建物は多くが崩壊します。しかし、ナボイ劇場だけは一切の破損がなかったそうです。私たちの父祖の世代はこのような人だったのですね。あれこれ指図をされなくても自分の仕事の範囲は自分で考え、より良いものにしようとする。君たちも、やがて仕事を持った時、自分の仕事にわけの分からない基準を当てられて、腹の立つことがあるかもしれません。でも、誇りをもって、たとえ誰に認められなくても、自発的にいい仕事をして下さい。ナボイ劇場を修復した父祖たちのように。

以上のようなことを書きました。この話をなぜ今思い出したかということ、世界で活躍する日本人の育成、これを目指して何かといえば「グローバル」という単語を使うのなら、もし今後ウズベキスタンで活躍する日本人がこのナボイ劇場の話を知らなかったら大恥をかくのではないかと、そう思ったからです。これまでに世界で活躍し、現地の尊敬を集めた祖父や父の世代のことを私たちはもっと知らなくてはいけないのではないかと、それを学校は教えなくてはいけないのではないかと、そう思います。ちなみにナボイ劇場には続きの物語があります。平成になって、日本に帰ることなくウズベキスタンで亡くなった日本兵の墓地の整備を日本はウズベキスタン政府に要請します。日本は数千万円を用意していたそうです。しかしウズベキスタン政府はその要請を拒否します。そのお金は受け取れない、今まで整備できていなかったことを恥ずかしく思う。友好の証として責任をもって整備します、そう言ったそうです。一方、日本は宙に浮いたお金をウズベキスタンの学校の整備と確か桜の苗木に使ったのでしたかね。いい話ですね。首都タシケントを訪れたらナボイ劇場を見てみたいと思いますよね。

エルトゥールル号の遭難事件のことは、映画にもなっていますし耳にしたことがあるかもしれません。和歌山県の串本に立派な慰霊碑が建っています。トルコの船が遭難したとき和歌山の人々が助けたのです。明治 23 年のことです。沈没した船の乗組員はおよそ六百人、岸に打ち上げられた生存者およそ七十名はほとんどが負傷者。串本の人々は自分たちも貧しかったはずですが手厚い看護をします。生存者はやがて無事に祖国に帰り、この話はトルコの教科書にも載ります。さて、1980 年から始まったイラン・イラク戦争というか湾岸戦争というか、あの戦争に日本人が巻き込まれます。イラクのフセイン大統領が「48 時間後イラン上空を飛ぶ飛行機を攻撃する」と宣言したときイランには 200 名以上の日本人が取り残されていたわけですが、日本政府には救出の手段がありません。そのときトルコ政府が飛行機を出してくれ、全員無事に日本に帰って来られたのです。エルトゥールル号の恩を返しただけと大統領は言ったそうです。やがてトルコで活躍する君たちの世代の若者がいるかも知れない。彼らはこの話を知っておくべきだと思いますか。もっともっと歴史に埋もれた、というか私たちが知らない多くの出来事があるように思います。世界に羽ばたこうとする若者ならできるだけ多くの物語を知っておくべきです。せいぜい杉原千畝くらいですよ、誰もが知っているのは。第 2 第 3 の杉原を知らないのは私たちの怠慢だよ。

#### 今週のおすすめ

・佐藤光浩 『ちょっといい話』 (アルファポリス文庫)

100 話あります。知っているものもありましたが、知らないものも多く、人間って捨てたものではないと、読んでそう思いました。君たちにも読んでほしい。

アメリカのメリーランド州では、感染予防のためにトナカイの搬入を法律で禁止しました。しかしクリスマスが近づくと、サンタさんの乗り物を引くのってトナカイではなかったか、ではメリーランド州の子どもたちはサンタさんのプレゼントがもらえないということかと、そこに気づいた 10 歳の子どもがいました。彼は父に相談し、父は知事に働きかけ、知事は「良い子にプレゼントを配るという目的に限り、12 月 24 日の深夜に赤鼻のトナカイが、メリーランド州上空を飛行することを認めます」との宣言を行いました。粹な知事ではないですか。こういう話がたくさん載っています。

私が知らなくて恥ずかしく思った話は、日本で唯一の警察神といわれる佐賀県の増田神社にまつわるエピソードです。明治 28 年頃佐賀県の高串地区でコレラが流行し、佐賀県警に応援要請が入ります。指名を受けた増田敬太郎巡査は直ちに村に入り、病人の手当てや隔離、健康な人への予防指導に奔走します。コレラに感染するからと村人たちが搬送を拒んだ遺体の消毒や埋葬も行い、村のために不眠不休で尽力しました。しかし本人もコレラに感染します。「高串のコレラは、私が全部背負っていきますから、安心してください」これが最後の言葉でした。高串に来てわずか四日後のことです。これほど素晴らしい 25 歳の若者がいたことを今まで知らなかった。恥ずかしく思います。他にもあと 98 話ありますから、君たちの琴線に触れる物語があると思いますよ。

BGM は Le Couple の ひだまりの詩 でした…。